『筑波応用言語学研究』21号(2014. 12)
筑波大学 人文社会科学研究科 文芸・言語専攻 応用言語学領域

バイリンガルとモノリンガルの日英語コードスイッチングの容認性

ー動詞句と時制に着目してー

吉田　絢奈

キーワード：文内コードスイッチング、日本語、英語、容認性判断テスト

1.　はじめに

バイリンガルにはモノリンガルとは異なる言語的特徴が見られると言われている（Grosjean 1989)。とりわけ、Spivey and Marian（1999）ではバイリンガルの言語の活性化に注目し、バイリンガルはひとつの言語を聞いているときも、もう片方の言語を活性化させていることを明らかにした。このように、バイリンガルのみを実験対象とし、バイリンガルの言語的特徴を導き出そうとする研究が行われてきたが、本研究ではモノリンガルと比較することでバイリンガルの言語能力の特徴を明らかにすることを目的とする。そのため、本研究では日本語モノリンガルと日英語バイリンガルに同様の日英語コードスイッチングの容認性判断テストを行った。

コードスイッチングとはふたつの言語が混在している言語産出であり、その例は（1）で示されるとおりである。

（1）それは memorize すればいい。　　(Azuma 1997：6)
　　暗記する
　　それは暗記すればいい。

（1）は文内コードスイッチング（intrasentential code-switching）と呼ばれ、一文内で言語の交替が行われている。コードスイッチングはバイリンガルの能力のひとつであると言われている（Bullock and Toribio 2012)。従って、モノリンガルにはコードスイッチングを認める能力はないと推測できる。しかし、（1）と類似する構造は（2）で示すような外国語の語彙に「―する」を伴わせて日本語の文内に動詞として挿入する借用語として存在する。

（2）亮が本をコピーした。

日本語モノリンガルは（2）の「コピーした」のような借用語を理解することは可能である。そして、日本語の能力を有する日英語バイリンガルも（2）のような借用語は理解可能である。つまり、日本語モノリンガルは借用語の構造に類似するような外国語の挿入は容認可能だか、コードスイッチングにあたる外国語の要素の挿入は容認不可能だと推測できる。対して、日英語バイリンガルは借用語の規則に従う外国語の要素の挿入も、コードスイッチングとなる外国語の要素の挿入も容認可能であるはずである。本研究はこのような容認性の相違を、日本語文内の動詞、もしくは動詞句の部分が英語にスイッチしたものを6パターン用いて、日本語モノリンガルと日英語バイリンガルに容認性判断テストを行った。

2. 先行研究及び本研究の予測

2.1 コードスイッチングに関する先行研究

まず、Mahootian（2006）によると、コードスイッチングでは次の要素において言語が交替する。それらは、文レベル、フレーズレベル、語彙レベル、もしくは形態素レベルである。文レベルでの言語の交替は文間コードスイッチング（intersentential code-switching）と呼ばれる。フレーズレベル、語彙レベル、形態素レベルでの言語のスイッチングは一文内で起こるため、文内コードスイッチング（intrasentential code-switching）と呼ばれ、本研究の研究対象である。フレーズレベル、語彙レベルでのコードスイッチングが可能であれば（3-4）に示す文の動詞（V）と動詞句（VP）のスイッチングのどちらもがバイリンガルによって容認されると考えられる。

（3）V（過去形）でのスイッチング
　私の弟は　よく　川の近くで　野球を played.

（4）VP（過去形）でのスイッチング
　私の弟は　よく　川の近くで　played baseball.

しかし、言語の交替が動詞で起こる際には、（3）のような過去形の動詞が挿入されるのではなく、不定形の動詞が挿入されることがある。この場合、コードスイッチされた不定形の動詞に文全体の言語の「する」に相当する形態素を伴わせ、時制や数の一致などを「する」を活用変化させることで表示する（Myers-Scotton 2005）。このような操作は do construction と呼ばれ、（5）に示すような例である（Myers-Scotton 2005）。

(5) トルコ語とオランダ語のコードスイッチング

kijk-en yap-ıyor[1]

見る-不定　する-進行/3 単

（みんなが）見ていた

（Backus 1996：238, Myers-Scotton 2005：336 からの引用）

(5) ではオランダ語の「見る」という動詞の不定形（kijk-en）にトルコ語の「する」に当たる yap が続いている。このような「する」を伴わせるスイッチングの現象を日英語のコードスイッチングに当てはめると (6) のような英語の不定形の動詞 (V) に日本語の「する」を接続させた例が推測できる。そして、日英語バイリンガルはこのような例を容認すると考えられる。

(6) V（不定形）＋「する」のスイッチング

私と私の友達は　先週末　私の部屋で　映画を watch した。

この (6) に示すスイッチングは、(7) のような外国語の語彙を日本語の動詞として扱う借用語と類似する構造である。

(7) 英語の語彙の日本語の動詞化

a. copy　→　コピーする　（Shibatani 1990：144）

b. announce　→　アナウンスする　（楳垣 1975：27）

日本語の文中に外国語の要素が組みこまれる際には、日本語の活用や形態素を伴わせることで可能である（Shibatani 1990）。外国語の語彙を日本語の動詞として利用する場合には、外国語の語彙に「—する」を伴わせることで可能になる（石綿 2001，楳垣 1975，Shibatani 1990，茂木 2012，矢崎 1975）。この場合、外国語の要素は片仮名で表記される点が (6) に示すコードスイッチングとは異なるが、形態的な構造が類似するため、日本語モノリンガルも (6) のようなスイッチングを容認すると考える。

そして、この do construction という操作は、コードスイッチングがフレーズ単位で生じることが可能であることから、(8) のように英語の不定形の動詞を含む動詞句 (VP) に対しても可能であり、バイリンガルによって容認可能だと推測できる。

(8) VP（不定形）＋「する」のスイッチング

私と私の友達は　先週末　私の部屋で　watch the movie した。

---

[1] 太字は筆者による追加であり、オランダ語を示す。細字部分はトルコ語である。グロスは Myers-Scotton (2005：336)のとおりである。

更に、コードスイッチングには double morphology（Myers-Scotton 2005）もしくは double marking（Wei 2013）と呼ばれる現象が確認されている。これは、一文内で内容語の言語が交替する際に、内容語に付随する接辞が内容語の言語と文全体の言語の両方で現れる現象である（Myers-Scotton 2005）。このように接辞がそれぞれの言語で表示される現象はコードスイッチングでは珍しい現象ではない（Wei 2013）。動詞の過去形が二重に表示されている例として（9）がある。

（9）ハンガリー語と英語のコードスイッチング

Csak　a　**Miss Christine**　**saw**-φ-t-a[2]　（Bolonyai 2005 : 326）

だけ　定冠詞　クリスティーン　見た-φ-過去-3 単/定

クリスティーンさんだけが見た

（9）では英語で既に過去形で表示されている saw に更にハンガリー語の過去形及び人称を示す接尾辞が付属している。このような構造を日英語コードスイッチングに当てはめると（10）のようになる。

（10）V（過去形）＋「した（過去形）」のスイッチング

私の先生は　先週　授業で　この本を recommended した。

また、コードスイッチングがフレーズ単位で生じることが可能であることから、（11）のように動詞句に対しても時制が二重に表示されることは可能であり、バイリンガルは容認すると推測できる。

（11）VP（過去形）＋「した（過去形）」のスイッチング

私の先生は　先週　授業で　recommended the book した。

2.2　容認度の予測

本研究では上述の（3）、（4）、（6）、（8）、（10）、（11）に示す 6 種類のスイッチングパターンに対し、日本語モノリンガルと日英語バイリンガルでは容認度が異なることを明らかにする。6 つのスイッチングの種類は表 1 に示す a から f にまとめているとおりである。スイッチングパターン a 及び b について、バイリンガルはコードスイッチングとして容認するが、モノリンガルはコードスイッチングの能力がないため容認出来ないだろう。スイッチングパターン c はコードスイッチングであり、また借用語と類似する構造を持つため、バイリンガルとモノリンガルの両者が容認するはずである。そして、スイッチングパターン d、e、f は全てコードスイッチングと考えられるため、バイリンガルのみが容認し、モ

[2] 太字及びグロスは Bolonyai（2005）のとおりである。太字は英語であり、細字はトルコ語である。

ノリンガルは容認しないだろう。これらの6種類のスイッチングパターンに対するバイリンガルとモノリンガルの容認の予測は以下の表1にまとめられる。

【表1】容認度の予測

スイッチングの種類					容認度の予測	
	V/VP	過去形	した	例	バイリンガル	モノリンガル
a.	V	過去形	---	（野球を）played	○	×
b.	VP	過去形	---	played baseball	○	×
c.	V	---	した	（映画を）watch した	○	○
d.	VP	---	した	watch the movie した	○	×
e.	V	過去形	した	（本を）recommended した	○	×
f.	VP	過去形	した	recommended the book した	○	×

○：容認する、×：容認しない

3. 実験

3.1 方法

日英語バイリンガルグループと日本語モノリンガルグループに日英語文内コードスイッチングをしている文を用いた同様の容認性判断テストを行った。

3.1.1 実験参加者

実験参加者は、日英語のバイリンガルのグループが10名（24～28歳、平均25.5歳）、日本語モノリンガルのグループが10名（20～26歳、平均23.1歳）の20名である。両グループの実験参加者全員の共通点は、生まれて初めて接触した言語が日本語であることと、家庭内では日本語を使用していることである。本研究では、バイリンガルとモノリンガルを区別する要素として、英語で話す環境で過ごした年数を使用し、その経験がない参加者をモノリンガルとし、3年以上そのような環境で過ごした経験のある実験参加者をバイリンガルとして区別した。日英語バイリンガルの実験参加者のうち9名が0～8歳までのうちに初めて英語に接触しており、1名のみ9～11歳までに初めて英語に接触している。日本語モノリンガルの実験参加者は全員日本国内で育ち、教育を受けている。英語への初めての接触は9名が9～14歳までのうちに経験したと回答している。1名のみ0～2歳のうちに初めて英語に接触している。このグループの全員の実験参加者が英語で話す環境にいた経験がない。

7名のモノリンガルにTOEICの受験経験があり（990点満点中545～930；平均：748.57、SD：142.91）、その得点は8名のバイリンガルのTOEIC受験経験者の得点（850 ～990；

平均：956.25、SD：52.9）よりも有意に低いものだった（$t(13)=3.84, p=.002$）。

3.1.2 項目

実験項目は次の（12-17）に示す 12 文の文内コードスイッチングの文である、スイッチされた英語の動詞、もしくは動詞句の 6 パターンのそれぞれに 2 文ずつ用意した。

（12）V（過去形）
a. 私の弟は　よく　川の近くで　野球を played.　(=3)
b. あの人は　数年前　大学で　英語を taught.

（13）VP（過去形）
a. 私の弟は　よく　川の近くで　played baseball.　(=4)
b. あの人は　数年前　大学で　taught English.

（14）V（不定形）＋した
a. 私と私の友達は　先週末　私の部屋で　映画を watch した。　(=6)
b. その運転手は　しきりに　車の中で　電話に answer した。

（15）VP（不定形）＋した
a. 私と私の友達は　先週末　私の部屋で　watch the movie した。　(=8)
b. その運転手は　しきりに 車の中で　answer his phone した。

（16）V（過去形）＋した
a. 私の先生は　先週　授業で　この本を recommended した。　(=10)
b. リサは　よく　喫茶店で　紅茶を bought した。

（17）VP（過去形）＋した
a. 私の先生は　先週　授業で　recommended the book した。　(=11)
b. リサは　よく　喫茶店で　bought the tea した。

これらの 12 文は 72 文の文内コードスイッチングされたフィラー文とともに提示された。全ての動詞は目的語に名詞をとる他動詞である。

3.1.3 手続き

実験は、Murvey Online Surveys を使用したインターネットによるアンケートによって行い、内容は全て文字化されたものを使用した。実験参加者はまず、言語背景などの個人

情報を入力した。次に、8問からなる練習問題を行った。そして、84問の項目の容認性判断テストを行った。実験参加者は練習問題と実際のテストの両方で1が不自然、6が自然である6件法を使用して自然さを判断した。(18) に示す指示文を練習問題の直前と、実際のタスクの直前に提示した。

(18) 指示文

日本語と英語を自由に使用して話すことができる話者（例：バイリンガル)は、二つの言語を混ぜて話すことがときどきあります。そのような話者から次のような文を会話で言われたときに、自然とかんじるか、不自然と感じるか判断してください。とても不自然と思う場合は1、とても自然と思う場合は6を選んでください。

3.2 結果

6種類の日本語文内での英語の動詞、もしくは動詞句のスイッチングに対して2文ずつ用意したため、12文が分析対象である。それぞれのスイッチングに対して容認するか否かを決定する基準として、3.5を採用した。3.5は容認度を測定する際に使用した6件法の中間値である。モノリンガル、バイリンガルのそれぞれから得られた容認度を、t 検定（片側検定）を用いて基準の3.5と比較した。その結果は表2のとおりである。

【表2】バイリンガルとモノリンガルの結果

スイッチングの種類					結果					
					バイリンガル			モノリンガル		
	V/VP	過去形	した	例	平均	t 値	P 値	平均	t 値	P 値
a.	V	過去形	---	（野球を）played	1.7 (0.29)	-6.19	.000	2.15 (0.25)	-5.45	.000
b.	VP	過去形	---	played baseball	4.4 (0.51)	1.77	.056	3.05 (0.4)	-1.11	.147
c.	V	---	した	（映画を）watch した	4.6 (0.41)	2.66	.013	3.75 (0.3)	0.83	.213
d.	VP	---	した	watch the movie した	4.15 (0.55)	1.18	.135	2.8 (0.29)	-2.41	.020
e.	V	過去形	した	（本を）recommended した	3.05 (0.35)	-1.27	.117	3.55 (0.34)	0.15	.443
f.	VP	過去形	した	recommended the book した	2.2 (0.37)	-3.47	.004	2.9 (0.46)	-1.29	.114

標準誤差：平均値の下段の括弧内に表示

P 値：片側検定

自由度：バイリンガル、モノリンガル共に9である

表 2 に示した結果より次のことが言える。まず、バイリンガルのコードスイッチングに対する容認性の結果では、c（V（不定形）＋した）のみ、3.5 よりも有意に高い容認度であり（$t(9)=2.66$, $p=.013$）、「容認する」という予測に従う結果が得られた。そして、b（VP（過去形））に対する容認度は 3.5 より有意傾向で高いこと（$t(9)=1.77$, $p=.056$）がわかり、「容認する」という予測に類似する結果となった。しかし、3.5 よりも有意に低い容認度となったスイッチングパターンがあり、それらは a（V（過去形））の容認度（$t(9)=-6.19$, $p=.000$）と f（VP（過去形）＋した）に対する容認度（$t(9)=-3.47$, $p=.004$）である。つまり、結果は、a（V（過去形））と f（VP（過去形）＋した）のスイッチングパターンはバイリンガルが容認しないことを示唆している。そして、この結果は「容認する」という予測と反するものであった。更に、d（VP（不定形）＋した）の容認度は 3.5 と有意な差がなく（$t(9)=1.18$, $p=.135$）、e（V（過去形）＋した）の容認度も同様に 3.5 と有意な差が確認されなかった（$t(9)=-1.27$, $p=.117$）。これら 2 種類のスイッチングパターンの結果も「容認する」という予測とは一致しないものとなった。

次に、モノリンガルの結果については表 2 より次のことがわかる。まず、3.5 よりも有意に低い結果となったのはスイッチングパターンの a（V（過去形））の容認度（$t(9)=-5.45$, $p=.000$）と d（VP（不定形）＋した）の容認度（$t(9)=-2.41$, $p=.020$）である。つまり、これらは、「容認しない」という予測と一致するものである。しかし、次の 4 種類のスイッチングパターンに対しては 3.5 と有意な差のない容認度が得られた。それらは、b（VP（過去形））の容認度（$t(9)=-1.11$, $p=.147$）、c（V（不定形）＋した）の容認度（$t(9)=0.83$, $p=.213$）、e（V（過去形）＋した）の容認度（$t(9)=0.15$, $p=.443$）、f（VP（過去形）＋した）の容認度（$t(9)=-1.29$, $p=.114$）である。スイッチングパターン c（V（不定形）＋した）は、モノリンガルも「容認する」と予測していたが、結果は 3.5 と有意差がないことから予測に反するものであった。スイッチングパターン b（VP（過去形））、e（V（過去形）＋した）、f（VP（過去形）＋した）に対しては、モノリンガルは「容認しない」と予測していたが、結果は 3.5 と有意差がないものとなり、これらも予測に従わなかった。

以上に述べた結果と先述した予測をまとめると次の表 3 のとおりになる。

【表 3】容認度の予測と結果

スイッチングの種類					容認度			
					バイリンガル		モノリンガル	
	V/VP	過去形	した	例	予測	結果	予測	結果
a.	V	過去形	---	（野球を）played	◎	×	×	×
b.	VP	過去形	---	played baseball	◎	?	×	?
c.	V	---	した	（映画を）watch した	○	○	◎	?
d.	VP	---	した	watch the movie した	◎	?	×	×
e.	V	過去形	した	recommended した	◎	?	×	?
f.	VP	過去形	した	recommended the book した	◎	×	×	?

○：容認する、×：容認しない、？：3.5 と有意差なし

3.3 考察

実験の結果より、バイリンガルはスイッチングパターン c（V（不定形）＋した）のみ容認し、予測と一致した。他の 5 種類のスイッチングに対しては容認するという予測に従わない結果であった。対して、モノリンガルの結果は a（V（過去形））と d（VP（不定形）＋した）は低い容認度を示し、予測に従うものであった。それ以外の 4 種類のスイッチングの容認度は 3.5 と差のない結果となり、予測と一致しなかった。

まず、バイリンガルの容認度の結果について do construction の構造をもつスイッチングパターン c（V（不定形）＋した）と d（VP（不定形）＋した）より確認する。スイッチングパターン c（V（不定形）＋した）の容認度（4.6）は 3.5 と比べて有意に高い値であり、予測と従った。d（VP（不定形）＋した）の容認度（4.15）は 3.5 と差がなく、予測に反する結果であった。これらより、不定形の英語の動詞であれば、「する」を伴わせることが可能であることがわかる。対して、不定形の英語の動詞句に「する」を伴わせた場合、バイリンガルにとって容認度が明確に示せない文であることが推測できる。なぜならば、分析で使用した基準値の 3.5 は、今回の実験において容認度判断のために使用した 6 件法の中央値であることから、「容認とも非容認とも区別できない」ということを示している可能性が考えられるからである。

次に、double morphology であるスイッチングパターン e（V（過去形）＋した）と f（VP（過去形）＋した）では、e（V（過去形）＋した）は 3.5 と変わらない容認度（3.05）であり、f（VP（過去形）＋した）は 3.5 より有意に低い容認度（2.2）であった。これらは両者ともに予測と反する結果である。スイッチングパターン e（V（過去形）＋した）の容認度（3.05）が 3.5 と差のないことから、このようなスイッチングはバイリンガルにとって容認可能とも不可能とも判断のつかないものであることが考えられる。そして、f（VP

（過去形）＋した）に対しては容認しないという判断であったが、これについては、時制が二重に表示されていることが原因として考えられる。これは、スイッチングパターン e（V（過去形）＋した）に対しても高い容認度が得られなかったことから推測できる。また、時制が二重に表れていないが、VP に「する」が接続しているスイッチングパターン d（VP（不定形）＋した）の容認度（4.15）と時制が二重に表示されている f（VP（過去形）＋した）の容認度（2.2）を比べると、有意な差が確認された（$t(9)=4.59$, $p=.001$）ことからも、時制が二重に表示されることが容認度に影響していることが考えられる。

最後にスイッチングパターンの a（V（過去形））、b（VP（過去形））では、b（VP（過去形））は有意傾向ではあるが容認し、a は容認しない結果となり、a のみ予測に従わなかった。スイッチングパターン a（V（過去形））に対してこのような結果になった原因として、次のことが考えられる。1 つ目として、動詞の主要部が英語にスイッチされる場合は必ず「する」を挿入する操作が必要であることである。上述のとおり、日本語内に外国語の語彙を動詞として扱う場合は、外国語に「する」を伴わせる必要がある。この借用語の規則が強く影響していることが考えられる。これは、a（V（過去形））と c（V（不定形）＋した）の容認度の間に有意な差が確認されたこと（$t(9)=6.60$, $p=.000$）と、a（V（過去形））と e（V（過去形）＋した）の容認度の間にも有意差が確認されたこと（$t(9)=3.10$, $p=.012$）からも支持できる。2 つ目として、構造的な要因が考えられる。それは、動詞句内の項の位置が英語のように主要語が先行する（head-initial）構造であるべきことが考えられる。つまり、本研究で取り扱った（19a）の文のような動詞句の構造ではなく、（19b-c）に示すような動詞句の構造であるべきだということである。

（19）V（過去形）

a. 私の弟は　よく　川の近くで　野球を played.　（=12a）

b. 私の弟は　よく　川の近くで　played 野球を。

c. 私の弟は　よく　川の近くで　played 野球。

英語の動詞が日本語の文内に挿入される際に、動詞句内で主要語が先行される構造が必要であるのか（19）のような構造の文を用いて今後調査する必要がある。

そして、モノリンガルの容認度に関して、スイッチングパターン b（VP（過去形））、c（V（不定形）＋した）、e（V（過去形）＋した）、f（VP（過去形）＋した）の容認度の範囲は 2.9 から 3.75 であり、どれも 3.5 と差がなく、予測と一致しなかった。基準として使用した 3.5 とは実験の容認度の判断で使用した 6 件法の中間値であることから、「容認とも非容認とも判断できない」ということを示している可能性が推測できる。つまり、モノリンガルは 4 種類のスイッチングに対して 3.5 と差のない容認度の結果となったが、これはモノリンガルにはコードスイッチングの容認性を判断する能力がないことを示していると考えられる。更に、スイッチングパターン c（V（不定形）＋した）は、日本語の借用語

の動詞化と類似する構造であるにも関わらず高くない容認度になった理由として、表記方法が考えられる。本研究では（20a）のように英語の部分を全てアルファベット表記であったため、モノリンガルは借用語とは捉えなかったことが推測できる。

（20）V（不定形）＋した

a. 私と私の友達は　先週末　私の部屋で　映画を watch した。　（=14a）

b. 私と私の友達は　先週末　私の部屋で　映画をウォッチした。

そのため、表記方法が容認度に影響を与えているのか（20b）のように表記が片仮名のものと（20a）のようなアルファベット表記であるものを比較し調査する必要があるだろう。

最後に、本研究には修正すべき実験的要因が 3 点ある。1 点目として、項目数の少なさである。6 種類のスイッチングパターンに対して 2 文ずつを作成したため、統計により結果を得るには十分な量のデータが得られなかった。2 点目として、実験参加者の人数の少なさが挙げられる。参加者が少なく、それにより集めたデータが少量であったことが結果に影響しているだろう。3 点目として、項目の文に使用している語彙が統一されていない点である。スイッチングパターンによっては同様の語彙を使用し構成されている文もあるが、全てのスイッチングパターンによって、同様の語彙を使用した項目を作成しなかった。そのため、スイッチされている語彙が異なるため、容認度が変化する可能性が考えられる。以上の 3 点は今後、類似する実験を行う際に統制すべき点である。

4.　おわりに

本研究では日英語バイリンガルと日本語モノリンガルの言語能力の違いを示すことを目的としており、そのために日英語コードスイッチングの容認性判断テストを行った。コードスイッチングはバイリンガルの特徴であり、モノリンガルとバイリンガルでは言語能力が異なるのであれば、コードスイッチングに対する容認度の判断が両者の間で異なるはずである。容認性判断テストの結果として、バイリンガルは本研究で使用した 6 種類のスイッチングの全てを容認するわけではなく、低い容認度を示すものもあった。このことより、バイリンガルはコードスイッチングの構造によって異なる容認性の判断を行っていることがわかった。対して、モノリンガルは一部のスイッチングに対しては低い容認度を示したが、半数以上のスイッチングパターンに対して基準値の 3.5 と差のない容認度を示していた。つまり、このことはモノリンガルにはコードスイッチングの容認度を判断する能力がない可能性を示している。

本研究では実験的に修正すべき要因があるものの、バイリンガルとモノリンガルではコードスイッチングに対して異なる容認度を示すものがあることがわかった。そして、この容認度の違いがバイリンガルとモノリンガルの言語能力の違いであるといえる。

【参考文献】

石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版

楳垣実(1975)『日本外来語の研究究』研究社

茂木俊伸(2012)「文法的視点からみた外来語—外来語の品詞性とコロケーション—」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編『外来語研究の新展開究』おうふう，pp.46-61.

矢崎源九郎(1975)『日本の外来語究』岩波書店

Azuma, S. (1997) Lexical categories and code-switching: A study of Japanese/English code-switching in Japan. *Journal of the Association of Teaching of Japanese*, 31 (2): pp.1-24.

Backus, A. (1996) *Two in One: Bilingual Speech of Turkish Immigrants in the Netherlands*. Tilburg: Tilburg Univ. Press.

Bolonyai, A. (2005) Developing English Verbs in Hungarian/English Codeswitching. J. Cohen, K. T. McAlister, K. Rolstad, and J. MacSwan (eds.) *ISB4: Proceedings of the 4th International Symposium on Bilingualism*. Somerville, MA: Cascadilla Press, pp. 317-327.

Bullock, B. E. & Toribio, A. J. (2012) Themes in the study of code-switching. B. E. Bullock & A. J. Toribio (eds.) *Cambridge Handbook of Linguistic Code-switching*. New York: Cambridge University Press, pp.1-17.

Grosjean, F. (1989) Neurolinguists, Beware! The Bilingual Is Not Two Monolinguals in One Person. *Brain and Language*, 36: pp.3-15.

Mahootian, S. (2006) Code Switching and Mixing. K. Brown (Editor-in-Chief) *Encyclopedia of Language & Linguistics*, Second Edition, vol.2. Oxford: Elsevier, pp. 511–527.

Myers-Scotton, C. (2005) Supporting a Differential Access Hypothesis: Code Switching and Other Contact Data. J. F. Kroll and A. M. B. De Groot (eds.) *Handbook of Bilingualism: Psycholinguistic Approaches*. New York: Oxford University Press, pp.326-348.

Shibatani, M. (1990) *The Language of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Spivey, M., & Marian, V. (1999) Crosstalk between native and second languages: Partial activation of an irrelevant lexicon. *Psychological Science*, 10: pp.281-284.

Wei, L. (2013) Codeswitching. R. Bayley, R. Cameron, and C. Lucas (eds.) *The Oxford Handbook of Sociolinguistics*. New York: Oxford University Press, pp.360-378.

【参考ウェブサイト】

Murvey Online Surveys. https://www.murvey.com/